

万葉集とポピュリズム 梅原ひろみ

この一年、改元の機を捉えて、「令和」の典拠となった万葉集に関わるニュースや文章を目にすることが多かった。歌壇ではその余波が続いているようだ。「歌壇」三月号は「越中、万葉の旅をうたう」の特集を組み、「短歌研究」同月号には品田悦一の講演録「万葉ポピュリズムを斬る」(前篇)が掲載されている。

前者では、十五名の歌人一行が富山県の万葉ゆかりの地をめぐるて詠んだそれぞれの歌と文章に加え、旅の最後に高岡市万葉歴史館で行われた坂本信幸館長の「越中の万葉と海」の講演録が掲載されている。講演を通してじっくりと一つの土地を掘り下げ、家持に思いを馳せ、風景を味わう歌群を読んでいると、海という切り口から万葉の世界が立ち現れてくる。折口信夫と春洋の墓地も旅程にあつてこれに言及する人も多く、万葉・折口の時代・そして現代、という時間の層の堆積を感じた。

一方、万葉集に穏やかに身を浸す「歌壇」の特集に対し、著書『万葉集の発明』(二〇〇一年)で、明治期に万葉集が国民国家の文化装置として国民歌集の地位に祭り上げられていく経緯を明らかにした研究者、品田悦一の講演録は、現代社会と切り結ぶ熱のあるものとなっている(タイトルの「ポピュリズム」は大衆の人気取り、大衆迎合主義といった否定的な意味で使われている)。

「短歌研究」昨年五月号の彼の『「令和」から浮かび上がる大伴旅人のメッセージ』では、令和の典拠となった「梅花歌三十二首」の序につき、一句だけ切り出しても解釈はできず、全体で理解すれば「底に権力者への憎悪と敵愾心が潜められている」ことを指摘していた。三月号は講演の前半部分で、「元号」という語についてと、東歌は庶民の歌ではなく、都から来た国司と各地の豪族である郡司たちの交流の中で生まれた、という二点が語られている。「庶民の歌までが載っている『万葉集』にあやかって、人々が美しく心を寄せ合う世の中を作りましょう」というのは万葉集の政治利用にほかならず、そもその理解が間違っていると、品田は警鐘を鳴らす(ただ、成立過程はともかく、東歌の持つ、当時の東国の人々の暮らしや人生を垣間見る窓としての価値は何ら下がるものではないし、彼の論点もそこにはなし)。

ところでひとつ気になったことがある。「万葉ポピュリズムを斬る」の副題は「われわれは、踊らされてはいけない、ぼーっと生きていちゃいけない。」と、センセーショナルに目を引く。前述の五月号には「よりによってこんなテキストを新年号の典拠に選んでしまった自分たちはなんとも迂闊であつたということです」の後に、読めない困るのでルビを振った、と続けたり、その補記に「この戦國的な文章が累を及ぼすことを危惧して」という記載がある。多くの耳目を集める為にはこういった書き方が効果的なのだろう。しかし、品田の本分と真意が揶揄そのものにはないと分かっている、書き方によって必要以上の拒否反応を一部の読者に引き起こすことも考えられ、勿体ないと思った。また読者が仮にこのタイトル・口調に快哉を叫び留飲を下げているとすれば、それはそれで次第に別の種類のポピュリズムに毒されてくることにはしないか、そんな疑問も頭をもたげた。